

理事長の『老球の細道』①

バスケットボール協会公認コーチ制度に思う

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

日本バスケットボール協会は今年度からベンチで指揮を執るコーチはそのカテゴリーに必要な「日本バスケットボール協会公認コーチ」の資格を持たなければならないとした。サッカーにおいては今や当たり前のことであるが、バスケットボールにおいてはここまでたどりつくのに12年かかった。

世の中の色々な職業においては資格を持たなければその仕事ができないのが世の常である。たとえば命をあずかる医者が無資格で行うことはありえない。ラーメン屋さんも床屋さんも看護師さんもみんな資格を持って仕事に励み、私たちは安心してその恩恵にあずかっていられる。しかし、なぜか「コーチ」は昔取った杵柄でなんとかお茶を濁すことができる。「コーチ」が仕事というコンセンサスが得られていない。プロコーチだけではなくアマチュアのコーチも広義の仕事である。学校の教員は部活動の指導も仕事である。

子どもたちにとっては、バスケットボールがあるから毎日を生き活きと暮らせ、バスケットボールによって人生を決する者もいる。毎日の大切な時間をバスケットボールにどれだけ多くを費やしていることか。そのような子供たちや保護者のためにも私たちは真摯な気持ちで日々の指導に当たらなければならない。

日々の指導とは、バスケットボールコーチの「四つのミッション」を果たすためにある。四つとは①バスケットボールを好きにさせる②バスケットボールの正しい基本を指導する③プレーヤーを上手にし、ゲームで勝利の経験を与える④文武両道や日常生活習慣の指導により人間的に成長させることである。このミッションを果たすためにも、我流や時代遅れにならないよう資格を有し日夜研鑽を積みながらコートに立たなければならない。

「公認コーチの資格をとるのにお金がかかる」。「資格などなくても指導はできる」。「資格を持っているから良い指導者だとは言えない」などの考えはもったもである。しかし、資格はコーチとして必要最低限のバックボーンであり、コーチという仕事が社会的なコンセンサスを得るためにも今の時代ではなくてはならないものだと思う。

片手間に間違っただけのボランティア精神で指導されては子どもたちが迷惑である。子どもたちは、オラがコーチは誰よりも熱心でバスケットを知っていて、常に研究している存在であると信じている。そういうコーチに指導されることを誇りに思っている。子どもたちや選手の期待を裏切ってはいけない。まずは資格をとるために学ぶことである。ソクラテスの「無知の知」を知ることができれば、さらに学ぶことに意欲が高まることだろう。

ロジェ・ルメール（サッカー前代表監督）は「学ぶことをやめたら教えることをやめなければならない」と言う。コーチが常に自戒しなければならない言葉だ。バスケットボールは日々進化し続けている。コーチが広い世界から目を背けていては「会津の中の蛙」コーチで終わってしまう。コーチが学ぶことから目を背けて選手たちに本当のこと、大切なことを語れるのだろうか。